『菅家須磨記』の基礎的研究・序説

―諸伝本とその奥書について〈付・架蔵本翻刻〉―

妹尾好信

【キーワード】菅家須磨記・須磨記・菅原道真・偽書・紀行

はじめに

『菅家須磨記』という作品は「菅原道真仮託の紀行」[1]とされているけれども、配流の旅の紀行部分は後半の四分の一ほどに過ぎず、大部分は失脚に至る過程と都を離れるまでの間の道真の心境描写や周辺の人々の動静が描かれている。終始一人称で記され、道真自記の体裁を取っているため、道真自作と信じられ珍重されてきたようだが、はるか後世の偽作であることは間違いない。文章は古体を装っているので耳慣れない表現が目立ち、決してこなれたものではなく、さらに転写過程での乱れも加わり、非常に難解である。

伝本は多く、版行もされていて二種の版本が知られるが、それらはあまり流布した形跡がなく、主に写本で伝わっている。本作品の伝来過程を知るためにも、また難解な本文を読み解くためにも、基礎的研究としての諸本調査が欠かせない。筆者はかつて、広島大学図書館所蔵の写本三本と、故稲賀敬二先生蔵本二本（写本一本・版本一本）の五本を取り上げて対校本を作成したことがある。[2]また、本文を二十八の小節に分けてかなり詳細な注釈を記した伝本が二本（八戸市立図書館蔵南部家本・北海学園大学蔵北駕文庫本）知られているが、そのうちの八戸市立図書館蔵本を翻刻紹介したこともある。[3]しかしながら、諸伝本の調査・研究についてはその後なかなか進められなかった。そこで、今回、国文学研究資料館の共同研究「基幹研究（A）・王朝文学の継承と展開」に参加させていただくことになったのを機会に、同館が収集し所蔵するマイクロフィルム資料や公開している各種データベースを用いて諸伝本を調査し、奥書によって伝来に関する情報を整理するとともに、行間や欄外への書き入れによって本文の読解に資する情報を得ようと考えた。『菅家須磨記』そのものは王朝文学とはとうてい言えないが、王朝の文人である道真に仮託した作品であってみれば、王朝文学の後世における展開の一様相を示すものととらえられようと思うからである。今回は、その第一歩として、諸伝本調査に関する中間報告をしてみたい。

一 伝本

本書の書名は一定しておらず、伝本に付けられた題号は「菅家須磨御記」「菅公須磨の御記」「菅丞相須磨御記」「菅丞相須磨之記」「菅聖廟須磨記」「菅神須磨記」「須磨記」「須磨之記」「菅家道の記」などさまざまである。『菅家須磨記』というのは多様な書名のうちのひとつに過ぎないのだが、『国書総目録』『古典籍総合目録』『国文学研究資料館蔵マイクロ資料目録』などが掲出書名としているので、これをもって代表させることにした。

諸伝本の所在を知るために、まず『国書総目録［補訂版］』第二巻（平成元年 岩波書店）の記すところを掲げる。

◉**菅家須磨記**（かんけすまのき）一冊 ㊀ 菅家須磨御記・菅公須磨の御記・菅丞相須磨御記・菅聖廟須磨記・菅神須磨記・須磨記・須磨之記 ㊁ 紀行 ㊂ 国会（中古叢書七〇）・内閣（一冊）（壺井義知写）・静嘉（二部）・宮書（一冊）（片玉集四四）・宮書伏見（江戸時代写）・学習院・九大（「すまの記」）（壺井義知注、文政九酒井吉徳写）（宝暦二写、付録共二冊）・京大・教大・慶大（二部）・早大・東大（一冊）（寛保三写）・東北大狩野（寛保二写）・名大皇学（享保一八速水房常写）・大阪府石崎（明和六小林嘉内写）・高知・金沢市加越能（富田景周校本）（松雲公採集遺編類纂一七五）・刈谷・鶴舞・西宮（天保六写）・蓬左（享保一六写）・北野・高野山宝城院・彰考・鈴鹿・多和・茶図成簀（安永九写）（一冊）・天理（文政六小笠原清寿写）・旧下郷 ㊄ 文化七版（成田梅甫書）― 岡山大池田・京大・大阪府石崎・高知・日比谷東京・岩瀬・豊橋・金刀比羅・竹柏、文政一〇版 ― 東大酒竹

右のように、写本三十八本、版本二種十本が記載されている。また、同書第八巻（平成一年 岩波書店）「補遺」には次のようにある。

菅家須磨記 ㊂ 宮書（「須磨之御記」、松嶋日記と合、烏丸光栄等詠和歌を付す）・岡山大池田（享保一三天江景敦写）（「北野聖廟須磨の記」、明和六土肥経平写）・京女大（享保二〇写）・教大（「須磨記伝」）・日比谷諸家（「須磨の記」、安永二写）・豊橋（文政一二羽田野敬雄写、遠江の道の記・扶桑拾葉集と合）（榊葉日記と合）（一冊）・神宮（「聖廟須磨御記」、享保一九写）（「聖廟須磨日記」、安永五写）（「聖廟須磨日記」）

削除 ㊄ 文化七版（成田梅甫書）― 岡山大池田・豊橋

「補遺」には写本十二本が追加されているが、版本二本が削除されているため、差し引きして、同書では、写本五十点・版本二種八本が記載されていることになる。

次に、『国書総目録』の続編である『古典籍総合目録』第一巻（平成二年 岩波書店）には次のように記載されている。

菅家須磨記（かんけすまのき）一冊　㊀菅家須磨御記・菅公須磨の御記・菅丞相須磨御記・菅聖廟須磨記・菅神須磨記・須磨記・須磨之記　㊁紀行　㊂菅家集の内　㊃大阪女子大（「須磨之記」一冊）・佐賀大小城鍋島（一冊）・射和（「須磨記」一冊）・太宰府天満宮（「菅丞相須磨之記」、文化三写　一冊）・天満宮（「須磨の記」、「菅家集」の内）（「須磨記」、寛保元沢田一斎写　一冊）（「菅家須磨之記」一冊）（一冊、「享保戊申之仲夏廿九日借高森氏蔵本所謄写了埴鈴家蔵」、「享保乙卯四月廿一借谷川氏本書写　奚疑斎」、「奚疑主人携此聖文来而請朱於余勘之於定本或加之案還云　春塘（多田義俊ノコト）」と奥書ある本の写　林宜橘書入あり）㊄文化七版―大阪女子大（「菅家須磨御記」一冊）・太宰府天満宮（「菅家須磨御記」一冊）・天満宮（「菅家須磨御記」一冊）

このように、同書には、写本八本、版本三本が記載されている。以上を合計して、写本五十八本、版本二種十一本が知られることになる。

一方、国文学研究資料館がホームページ上で公開している〈「日本古典籍総合目録」データベース〉（平成十九年八月現在）により、「菅家須磨記」で検索すると、以下の三十八件がヒットした。

1　須磨の御記、国文研、サ5―20、写、1冊
2　菅丞相須磨之記、北海学園北駕、16―7―14、F102、写、1冊
3　菅丞相須磨之記、八戸図南部―南一五―二一一、写、文化五、二六・五×一九・九、1冊
4　菅丞相須磨之記、八戸図、96―206―3、写、1冊、M
5　筑波大図、6―69―4、F48、写、1冊
6　須磨記、筑波大図、6―144―3、F73、写、1冊
7　菅家須磨記、彰考館、32―370―6、写、1冊
8　須磨記、早大古臼、ル4　1603、写、1冊
9　須厂の記、書陵部、20―56―1―256、J88、写、1冊
10　須磨記、書陵部、20―452―9、写、1冊
11　菅家須磨記、刈谷図村上、30―105―5―1、F368、写、1冊
12　菅神／すまき、名古屋鶴舞図、89―191―7、写、1冊
13　須磨記、名大皇学館、7―24―1、F151、写、1冊
14　聖廟御記／須磨の記、蓬左文庫、48―68―5、F225、写、1冊
15　須磨の記、蓬左文庫、48―68―6、F226、写、1冊
16　須磨記、射和文庫、Ⅵ54、写、1冊、二七・五×一九・八cm、11丁
17　須磨記、射和文庫、38―12―11、K46、写、1冊
18　須磨記、神宮文庫、34―160―10―9、写、1冊
19　菅家須磨御記、京大大惣本、8―43カ11、刊、文化7、大、

1帙、1冊

20 須磨道記、陽明文庫、55―193―2、F800、写、1冊

21 須磨記、北野天満宮、1―0―16 宝364、写、1軸、三三・一×七四六・〇cm

22 菅公須磨之記、北野天満宮、1―0―17 カ50、写、1冊、二七・二×一九・八cm

23 菅家須磨御記、北野天満宮、1―0―18 ス7、刊、文化7、1冊、二六・七×一八・八cm

24 須磨之記、大阪女大図、915・5 S4、写、大、1冊

25 菅家須磨御記、大阪女大図、914・5 N5、刊、文化7、大、1冊

26 須磨の記、大阪天満宮、二―七九、写

27 須磨記、大阪天満宮、三―三、写、寛保1、1冊

28 菅家須磨之記、大阪天満宮、三―四、写、1冊

29 菅家須磨御記、大阪天満宮、三―五、刊、文化7、1冊

30 菅家須磨記、大阪天満宮、三―六、写、1冊

31 菅家須磨乃記、大和文華、257―165―1、写、1冊

32 菅家須磨記、ノートルダム特殊、黒G220、写、天保2、1冊

33 菅家須磨記、ノートルダム清心、332―223―4、写、1冊

34 須磨の記、多和文庫、271―84―8、F1313、写、1冊

35 菅家須磨記、佐賀大鍋島、〇九四―四、写、1冊

36 〔須磨の御記〕、相愛大春曙

37 須磨記、吉永登、ヨ1―16―11、写、1冊

38 須磨記／菅家、土佐山内家宝資、99―128―1、写、1冊

三十八件のうち、3と4、16と17、32と33は同一本の重複なので、実際は三十五本で、うちわけは写本が三十一本、版本が四本である（36の相愛大春曙文庫蔵本は写・刊の区別が記されないが、『春曙文庫目録（和装本編）』（平成五年 相愛大学・相愛女子短期大学図書館）によれば、享保十九年釈氏浄慧の奥書を持ち、『松嶋日記』と合冊された写本である）。『国書総目録』『古典籍総合目録』に記載されない本も十数本含まれている。

これらの記事を参考に、各文庫・図書館の蔵書目録をも参照し、その他所在の知られている本の情報も加えて、諸伝本を一覧すると、現在のところ次の通り、写本八十四本、版本二種十二本が挙げられる。◎印は実見調査し得た本、○印はマイクロフィルムまたは紙焼写真によって調査した本、□印は所蔵機関の蔵書目録による情報、△印は『国書総目録』・『古典籍総合目録』・「日本古典籍総合目録」データベース等による情報である。

【写 本】

◎北海学園大学蔵北駕文庫本 「菅相蒸須磨之記」「菅丞相須磨之記」 1冊 弘化元年 徳永氏写 （文二九四） ＊注釈本。奥書「右菅相公須磨之記乞假某氏藏本令／兒輩寫之而或疑字或誤字

但依元／本已故藍書其傍以備再考云／文化乙丑夏五穀旦　尚徳堂主人守拙」。見返貼紙「元本は應永年中の写本ニ而、むしばみ多く／有之候所今文化乙丑（二年　九十三年トナル）の年夏尚徳堂主人借用／写置候よし此本の末にことはり書有之候へ共／此本手入綴直しの節取除き候儘に而御座候ニ付／古文面書直し印置候ものなり／弘化元年孟春日　徳永氏」。朱傍記多し。「蜃気楼藏」印。

◎八戸市立図書館蔵南部家本　「菅丞相須磨之記」　1冊　文化二年

尚徳堂主人守拙写　（南一五－二一一）　＊注釈本。奥書「右菅相公須磨之記乞假某氏藏本／令兒輩寫之而或疑字或誤字但依／元本已故藍書其傍以備再考云／文化乙丑夏五穀旦　尚徳堂主人守拙」。朱傍記多し。

□東北大学蔵狩野文庫本　「菅公すまの御記」　1冊　寛保二年

五玄叟写　（四－二八四九七－一）

○筑波大学蔵A本　「須磨の記」　1冊　（ル－一七〇－八三）

＊奥書「此一書加州金澤自川島氏傳来之尤殊勝之御記也／義知判」

「□□（虫損）者菅神御記也讀者盥漱而可拜見也」「菅贈大相国貶ニ太宰府之行至ニ須磨ニ一記一巻感恨不少レ矣菅氏之／縉紳六家高辻五条唐橋東坊城桑原清岡皆失ニ之ヲ於中／古之兵火ニ不レ傳ニ于子孫ニ一也加賀條某卿得ニ一本於金澤府一贈ニ傳／寫本一各一部諸菅家也別ニ出レ自レ筑ニ前一商夫手之本合ニ彼ノ加賀／本一大同小異今在ニ清家文庫一也以ニ両本一一過挍ニ合之一粗如皈正本／讀者正ニ其添塵一　多田義俊書豊軒」。傍記・傍注・欄外注多し。付箋あり。

○筑波大学蔵B本　「須磨記伝」「須磨記」　1冊　（ネ－三〇八－一〇一）　＊奥書「右須磨の記はみちさねの御自記也元文四年未三月八日肥後国八代の住本多平八所持なす／本をもて写之　箕作田保布」、以下、安永四年、天明元年の奥書がある由のメモあり（マイクロフィルムの撮影状況不良のため判読困難）。欄外注・振漢字なし。「茂木實光」印。

○彰考館文庫蔵本　「菅家須磨記」　1冊　（和六－〇七八七九）

＊奥書なし。傍注・振漢字多し。欄外注なし。本文漢字表記（ルビは片仮名）多し。

◎国会図書館蔵本　「須磨の記」　1冊　（わ〇八一－九）　＊「中古叢書」第七〇冊。奥書「此一書加州金澤川嶋氏より至來して／うつしとりぬ尤殊勝之御記也」。朱傍記多し。墨欄外注あり。

◎国立公文書館蔵内閣文庫A本　「菅亟相須磨記」　1冊　（一七七－一一〇〇）　＊朱の傍記・欄外注あり。「淺草文庫」印。

◎国立公文書館蔵内閣文庫B本　「須磨記」　1冊　壺井義知写

（一七七－一一〇二）　＊奥書「此一書加州金沢或人〈川嶋氏（朱傍記）〉之許より借写して且加傍字訖　壺井義知（印）」。旧内務省本。朱・墨の傍記・欄外注あり。※『日本古典偽書叢刊』第二巻底本。

□静嘉堂文庫蔵A本　「菅神須磨記」　1冊　（八二－六三）

＊宮島藤吉旧蔵本。校正本。

□静嘉堂文庫蔵B本　「須磨の御記」「菅神須磨記」　1冊　寛保二年写　（八二―六四）

□静嘉堂文庫蔵C本　「須磨乃記」　1冊　（五一五―五―二一四五六）　＊松井簡治旧蔵本。朱筆書入本。

□静嘉堂文庫蔵D本　「菅家／須磨記」「須摩之記」　1冊　（五一五―五―二一四五五）　＊松井簡治旧蔵本。

□宮内庁書陵部蔵A本　「菅家須磨の御記」　1冊　（三五一―三七〇）　＊谷森本。江戸写。

□宮内庁書陵部蔵B本　「菅公すまの御記」　1冊　（葉―一三〇三）　＊葉室本。江戸写。

○宮内庁書陵部蔵C本　「須广の記」　1冊　（四五八―一）

＊「片玉集」巻四十四の内。　奥書「右須广記者天神之御自記也法師家被相恵／之至所秘之也」「元文四年己未三月八日肥後八代本田平助之本／を以写之　箕田氏保沖」。傍記あり。欄外注なし。

○宮内庁書陵部蔵D本　「須磨記」　1冊　（伏―二八二）　＊伏見宮本。江戸写。有朱註等。傍記・傍注あり。欄外注は冒頭一箇所のみ。奥書なし。

□宮内庁書陵部蔵E本　「須磨之御記」　1冊　（黒―四一）

＊「松嶋日記」と合写。烏丸光栄等詠和歌を付す。黒川本。※『和漢図書分類目録　増加』では「松嶋之御記」とある。

△東京大学蔵A本　写

△東京大学蔵B本　写　寛保三年写

◎国文学研究資料館蔵本　「須广の御記」　1冊　（サ五―二〇）

＊奥書「此一書加州金澤川嶋氏より到来して／うつしとりぬ尤殊勝之御記也　朱字傍註之義知判」（墨）「此書者　菅神御記也讀者盥漱而可拜見也」（朱）。朱読点・傍記・欄外注あり。

□東京都立中央図書館蔵諸家文庫本　「菅相公須磨の記」　1冊　安永二年　沙門澄方写　（特七七九）　＊蜂屋茂橘旧蔵書。

□早稲田大学蔵本　「須磨記」　1冊　享保二十年　嶷子写　（ル四―一六〇三）　＊本奥書「是一書加州金沢川嶋氏より至来してうつしとりぬ　尤殊勝の御記也」、書写奥書「右之一書西条侯臣余師牟婁先生従紀州同学士求之依為珎昼秘之状余也　欲之父矣古文辞実至矣　乎于時享保乙卯冬十一月関武於青山信陽侯別業嶷子写」。「信陽上田成沢蔵書」印。朱点・朱書傍注あり。※津本信博編著『近世紀行日記文学集成　一』（早稲田大学出版部　平成五年）の底本。

△学習院大学蔵本　1冊

△慶応大学蔵A本　1冊

△慶応大学蔵B本　1冊

△お茶の水図書館蔵成簣堂文庫A本　安永九年写

△お茶の水図書館蔵成簣堂文庫B本

□東海大学蔵桃園文庫A本　「須磨記」　1冊　（桃二四―四四）

＊巻末「須川信行蔵」。貼紙（第一葉表）「須磨記　蘭州先生自筆」。朱・墨書入あり。

□東海大学蔵桃園文庫B本　「須磨記」　1冊　寛保三年　可兒久敬写　（桃二四－四五）　＊奥書「此須磨記仁極而希也然於高森安立法眼花經丈吾仁懇志於以借與而書寫於許仁因而吾家蔵志侍留登云爾于時寛保癸亥歳極月八日書寫畢　可兒氏久敬（印）」。

□東海大学蔵桃園文庫C本　「須磨記後案」　1冊　延享四年　遠里道次写　（桃二四－四六）　＊奥書「此一書加州金澤川島氏より到来して寫とりぬ尤殊勝之御記也　朱字傍注―　義知判」「此書者菅神御記也讀者盥漱而可拜見也此巻右にいへることくすかはら御神の御記にて尤珍敷御作なりふかく仰きあさはかに他見有へからすあなかしこ　享保十六亥年霜月下八日」「墨付十三丁」「延享四丁卯年正月十五日井坂氏ヨリ重季乞求書寫畢　遠里　道次（花押）」。「須磨記後案」を付す。

□東海大学蔵桃園文庫D本　「須磨記後案」　香川景樹著　1冊（桃二四－四七）

△豊橋市中央図書館蔵A本　1冊　文政十二年　羽田野敬雄写

＊「遠江の道の記」「扶桑拾葉集」と合写。

△豊橋市中央図書館蔵B本　1冊　＊「榊葉日記」と合写。

△豊橋市中央図書館蔵C本　1冊

○刈谷市中央図書館蔵村上文庫本　「菅家須磨記」　1冊　（一八八七）　＊奥書「奥書ニ云／此一書加州金澤川邊氏より出来／して写しとりぬ尤殊勝の御記也／右壺井氏以朱添文字令便覧也」。「大正記念藤井図書」印。欄外注なし。行間注少々あり。振漢字なし。「菅家御詠百首」と合写。

○名古屋大学皇学館文庫蔵本　「須磨記」　1冊　元文五年　藤原親岑写　（皇―九一五―Su）　＊奥書「此一書加州金沢川嶋氏より至來して／うつしとりぬ尤殊勝之御記也　朱字傍注―　（花押）」「此一冊先年予書写畢　然庄田右衛門尉／依所望遣之今致謄写被返之也／享保癸丑歳初秋上旬　速水房常」。「此壱冊速水先生以本書写了堅／可停止外見者也／元文五年六月中旬　藤原親岑（印）」。傍記・欄外注あり。「神宮皇學館大學圖書之印」印。

○蓬左文庫蔵A本　「（聖廟御記）須磨の記」　1冊　享保十六年　圓山賀納写　（七－六）　＊奥書「此一書加州金澤川嶋氏より至来して写とり／ぬ尤殊勝之御記也／朱字傍注義知判」「此書者　菅神御記也讀者盥漱而可拜見也」「此巻右にいへることく菅原御神の御記／にて尤珍敷御作なりふかく仰きあさはかに／他見あるへからすあなかしこ／享保十六亥年霜月下八日　圓山賀納」。朱傍記・欄外注あり。

○蓬左文庫蔵B本　「須磨の記」　1冊　（七－七）　＊江戸末期写。奥書なし。罫紙・界線あり。傍記・欄外注あり。

○名古屋市鶴舞図書館蔵本　「菅神／すまき」　1冊　（河ス一〇）

＊奥書「再三校合加朱字傍注畢　壺井義知判／午水無月一模畢（朱判アリ）」。

○射和文庫蔵本　「須磨記」　1冊　（Ⅵ－五四）　＊古田理喬旧蔵。奥書「再三校合加朱字傍注畢　壺井義知／印判」。傍記少々あり。

欄外注なし。

△神宮文庫蔵A本　「聖廟須磨御記」　1冊　享保十九年写　（八―三―一三四八）

△神宮文庫蔵B本　「聖廟須磨日記」　1冊　安永五年写　（八―一―八七三）

△神宮文庫蔵C本　「聖廟須磨日記」　1冊　（八―一―八七四）

○神宮文庫蔵D本　「須磨記／菅家」　1冊　（三／一四四八）

＊「清渚集」の内（第一冊末尾）。奥書「この須磨の記といへるは菅家のしるし給ふける／よしにて加賀国川嶋の何かしかもたりけるを／壺井義知これをうつし又多田義俊かうつし／とりけるとて世にひろこれりつら〳〵文のさまをかう／かへ見るに昌泰の比ほひのものとも見えねは後に／まねひつくりつらんかされとやつかり経雅今／かな文をあつめつれはたゝにすてんもかひなく／又世にあるものをいつはりなりとさかしらに／さためあへんもをこなれは今うつしとりて／くはへぬ時にしたかはゝ巻の始におくへき／をかくうたかはしけれはさるものを始につらねんも本意なくてこの巻の末にかいつけ置なりけり経雅かいふ」。傍注・欄外注なし。

○神宮文庫蔵E本　「菅家左遷記」　1冊　宝暦七年写　（三―一―一四八三）　＊本奥書「此一書加州金沢河嶋氏より出来して／うつしとりぬ」。冒頭に激しい損傷あり。「赤染衛門松嶋記」「高雄山順覧記」と合写。

△金沢市立玉川図書館蔵加越能文庫A本　1冊　＊富田景周校本。

△金沢市立玉川図書館蔵加越能文庫B本　1冊　＊松雲公採集遺編類纂一七五。

△京都大学蔵本　写本　1冊

△京都女子大学蔵本　1冊　享保二十年写

□龍谷大学大宮図書館蔵A本　「須磨之記」　1冊　宝暦七年　遵宗写　（九一四―三―一）　＊写字台文庫本。

□龍谷大学大宮図書館蔵B本　「須磨記」　1冊　（九一四―三―一―一）

○陽明文庫蔵本　「須磨道記」　1冊　＊横本。列帖装。奥書なし。傍注・欄外注なし。

△北野天満宮蔵A本　「須磨記」　1軸　（一―〇―一六　宝三六四）　＊三条天皇宸翰。

△北野天満宮蔵B本　「菅公須磨之記」　1冊　（一―〇―一七カ五〇）　＊宝暦五年識語。明治四年藤崎家興奉納。

△京都市某家蔵本　「菅家須磨記」　1冊　寛政九年写　※国文学研究資料館「日本古典文学調査データベース」による。

○奈良女子大学蔵本　「須磨記」　1冊　（K六一―一三一）

＊奥書「奥書曰　此一書加州金澤川嶋氏ヨリ到来シテ寫シトリヌ／最殊勝之御記也／右　壺井氏以来添文字（朱）令便覧也」「此書者菅神御記也読者盥漱而／可拝見也」「享保乙卯歳春二月下弦寫之／兒玉十郎平永言（改直方）」「上頭傍注ハ壺井霍翁ノセラレタ

リ傳寫ノ／假名ノ誤真(ママ)方カ附タルナリ」「安永辛丑歳春二月下旬於棋(ママ)州大坂中之／嶋　秋元直右衛門平盛茂寫焉／天明六丙午歳冬十一月十一日寫之／阿陽麻植郡川田邑鹿兒島和紀治藤原政明／寛政貳庚戌歳夏四月三日寫之／阿陽眉山之麓　佐藤徳太夫藤原元古寫焉」「寛政三乙亥歳五月藤元古子自持賜之予」。傍記あり。欄外注なし。※奈良女子大学附属図書館ホームページ「原典画像データベース」による。

○大和文華館蔵本　「菅家須磨乃記」　1冊　文政九年写　（鈴鹿文庫八－六一五七）　＊奥書「此一書加州金沢川嶋氏より出来してうつしとりぬ／尤殊勝之御記也　義(朱印)」「一本云右壺井氏以朱添文字令便覧也」「右一冊其義知之秘蔵也最殊勝之御記／御自筆の再写堅相写不聴他覧以約予／門弟之間任懇望写之乎／享保己酉壬菊上瀚／菅原（花押）」「此一巻者菅原長公朝臣所持為秘蔵之以写本写之／文政九丙戌仲龝中旬〈墨字ニテイ本ト書入タルハ今以此本別本所校合ナリ〉」。「尚時舎蔵」印。朱傍書・欄外注あり。

△天理図書館蔵本　文政六年　小笠原清寿写

□竹柏園文庫旧蔵本　「須磨記」　1冊　＊天理図書館現蔵。建武二年桑門釋、文明元年一條兼良の識語あり。傍書あり。「星野文庫」印。

△高野山宝城院蔵本　1冊

□大阪府立図書館蔵石崎文庫A本　「菅家須磨記」　1冊　明和六年　小林嘉内写（谷川士清本ノ写）（二二三・六d－二）

□大阪府立大学（旧大阪女子大学）図書館蔵本　「須磨之記」　1冊　（九一五－五　S四）　＊奥書「此一書加州金沢川島氏より到来して写ぬ尤殊勝之御記也義知判」。

□大阪市立大学蔵森文庫本　「須磨記」　1冊　明治十六年　桂花園主人写　（九一五・三SUM）

□大阪天満宮蔵A本　「須磨の記」　1冊　（二－七九）　＊「菅家集」の内。

□大阪天満宮蔵B本　「須磨記」　1冊　寛保元年　沢田一斎写（三－三）　＊「右須磨記一帖、借速水氏蔵本書写一校畢　寛保紀年季秋　奚疑斎」。「奚疑斎蔵書」印。

□大阪天満宮蔵C本　「菅家須磨之記」　1冊　（三－四）　＊多田義俊ノ記、「墨校入江昌喜(ママ)、末ニ「此書加州金沢川嶌氏より到来して写ぬ、尤殊勝之御記なり、壺井義知判」ナドヲ写シアリ。河内屋亀七奉納。

□大阪天満宮蔵D本　「菅家須磨記」　1冊　（三－六）　＊本奥書「享保戊申之仲夏廿九日借高森氏蔵本所謄写了　埴鈴家蔵」「享保乙卯四月廿一借谷川氏本書写　奚疑斎」「奚疑主人携此聖文来而請朱於余勘之於定本或加之案還云　春塘（多田義俊ノコト）」。奉納奥書「ことし春此書を得て残し置きしをここに奉納す　昭和十五年九月浪華書肆中尾松泉堂主」。林宜橘書入あり。

□相愛大学蔵春曙文庫本　「須磨の御記」　1冊　享保十九年釋氏浄慧写　（九一五－四S　春五〇六）　＊「松嶋日記」と合

写。奥書「此書加州令澤川嶋氏より至来してうつしとりぬ／尤殊勝之御記也／朱字傍注　義知判」「此書者菅公御自記也以金丸久方寫本寫之而已／享保一九歳次甲寅仲夏下旬第五日成功／釋氏浄慧」。一冊の末尾「于時享保十九甲寅年六月朔日以金丸久方本書寫之／釋氏浄慧」。

△西宮市立図書館蔵本　1冊　天保六年写

□岡山大学蔵池田家文庫A本　「須磨記」　1冊　享保十三年　大江景敦写　（P九一五―九）

□岡山大学蔵池田家文庫B本　「北野聖廟／須磨の記」　1冊　明和六年　土肥経平写　（P九一五―五）　＊奥書「此一書加州金沢川島氏より到来して写ぬ尤殊勝之御記也義知判　此書は菅神御記也諸者盥漱而可拝見也」。

○ノートルダム清心女子大学蔵黒川文庫本　「菅家須磨記」「須磨の記」「須磨記」　1冊　天保二年写　（黒　G二二〇）　＊本奥書「再三校合加真字傍注了　壺井義和（ママ）」「右須磨記者／菅神御自作也肥後八代本多氏ノ本ヲ以テ謹寫之」「異本奥書／右須磨記者菅原道真公左遷之時御自記也師家／秘蔵之本元文四年己未三月八日肥後八代本田平助之／本以寫之者也」、書写奥書「天保二年卯季秋初七　八十六翁（花押）」。欄外注なし。行間注もほぼなし。振り漢字多し。

◎広島大学蔵A本　「須磨の記」「須磨記」　1冊　寛政十年　山尾公茂写　（国文七六〇九N）　＊本奥書「此書者、菅神御記也、読者盥漱而可拝見也、」「享保乙卯歳春二月下弦写之／児玉十郎平（改直方）永言」「上頭傍注ハ壺井霍翁ノセラレタリ伝写ノ／仮名ノ誤ハ直方ガ附タルナリ」「安永辛丑歳春二月下旬於摂州大坂中之島／秋元直右衛門平盛茂写焉」、書写奥書「寛政十戊午歳四月中旬　山尾至源公茂写之」。「五明文庫」印。

◎広島大学蔵B本　「菅家道の記」「かん家道の記」　1冊　伝福田美楯筆　（国文一六八五N）　＊奥書「再三校合加朱字傍注」（墨）「古学者或云偽書」（朱）。「福田氏蔵書」印。題簽に「福田美楯筆」とあり。

◎広島大学蔵C本　「須磨記」「菅神須磨記」　1冊　明和三年重顕写　（国文六二〇九N）　＊本奥書「此一書加州金沢川島氏より到来して／写ぬ尤殊勝之御記也　義知判」「菅贈大相国貶太宰府之行至須磨記一巻感／恨不少矣菅氏之縉紳六家高辻五条唐橋／東坊城桑原清岡皆失之於中古兵火不／伝于子孫也加賀条某郷得一本於金沢府／贈伝写本各一部諸菅家也別出自筑前一商／夫之本合彼加賀本大同小異今在清家文庫也／以両本一過校合之粗加皈正本読者正其添塵／多田義俊書豊軒」、書写奥書「明和三丙戌歳五月下旬写得之　重顕／世々をへて須磨のうら波かけまくもかしこき神の恵をそ知る」。

◎安田女子大学蔵稲賀文庫本　「菅聖廟須磨記」　1冊　安永八年石川自寛写　＊本奥書「此一書津田有栄秘してをかれしをある日／予にしめし殊勝の御記也恭是を拝すへしと／元文三戊午十月

十七日　東武青山産士／光平謹書」、書写奥書「右書安永八己亥年中春写之／石川自寛」。「堀内図書」印。「松島記　清少納言」と合写。稲賀敬二先生旧蔵本。

○多和文庫蔵本　「須磨の記」　1冊　宝暦九年写　（五―九）

＊奥書「此一書加州金沢川嶋氏より至来して／うつしとりぬ尤殊勝の御記也　判」。前見返識語「題記　須磨の記／伏原家／三位清原宣條卿」「右御題記ハ後藤一先生依恵申請給処也扨右之御記ハ北野御文庫ニ在之／或宮仕此度被引合処御本ニ相違無之由但シ外題ハ　須磨之御記と有之由／此御記内々申傳候者此御記之初中後之中初後ハ伊勢物語時代之／御文法ニ而御作ニ相違有間敷候中ハ（文勢花麗ニテ）源氏物語之時節之文法ニ御座候／中之分ハ漫滅之所を後人補申モノト相見ェ候由　宮仕之説／伏見故宮様初而御覧甚タ御感被遊候由宇野酔翁老人ヨリ（同八月十二日）文通如此申來ル／寶暦九卯歳仲春曽我右義合子ヨリ借写之畢」。傍記・欄外注あり。「香木舎文庫」印。

○高知県立図書館蔵山内文庫本　「須磨記　菅家」　1冊　（ヤ九一一―二三）　＊奥書なし。傍記・欄外注あり。「山内文庫」「谷干城玩書」他印。

△九州大学蔵A本　「すまの記」　1冊　＊壺井義知注。

△九州大学蔵B本　1冊　文政九年　酒井吉徳写

△九州大学蔵C本　付録とも2冊　宝暦二年写

□太宰府天満宮蔵本　「菅丞相須磨之記」　1冊　文化三年　成田梅甫写　（西高辻家蔵書目録一四）

□佐賀大学蔵小城鍋島文庫本　「菅家須磨記」　1冊　（〇九四―四）

○吉永文庫蔵本　「須磨記」　1冊　寛延二年　十川能範写　（一〇六五）　＊奥書「再三校合加朱字傍注畢　壺井義知印判」「寛延二年己巳三月五日寫之／北野社中／十川能範（印）」。朱傍書あり。吉永登氏蔵本。

【版　本】

《文化七年版本》

△東京都立中央図書館蔵本　1冊

□西尾市立図書館蔵岩瀬文庫本　「菅家須磨御記」　1冊　（一二六―四二）

□京都大学蔵大惣本　「菅家須磨御記」　1冊　江戸・須原屋茂兵衛、京・河南儀兵衛他　（八―四三カ一一）　＊成田梅甫書。文化六年奥書。春日楼蔵版。

△北野天満宮蔵C本　「菅家須磨御記」　1冊　京都・林伊兵衛他（一―〇―一八　ス七）　＊成田梅甫書。文化六年奥書。

□大阪府立図書館蔵石崎文庫本　「菅家須磨御記」　1冊（九二四―四）　＊成田梅甫書。文化七年京都河南儀兵衛等刊本。

□大阪府立大学（旧大阪女子大学）図書館蔵本　「菅家須磨御記」　1冊　春日楼蔵版　（九一四―五　N五）　＊刊記「文化七年庚午春三月吉辰春日楼蔵板」。

□大阪天満宮蔵本　「菅家須磨御記」　1冊　江戸須原屋茂兵衛・

京都河南儀兵衛等二二肆（三―五） ＊成田梅甫筆。春日楼蔵版。
△竹柏園文庫蔵本 刊 文化七年
□金刀比羅宮図書館蔵本 「菅家須磨記」 1冊 （七五―三）
□太宰府天満宮蔵本 「菅家須磨御記」 1冊 京都河南儀兵衛等刊 （天満宮文庫蔵書一八） ＊成田梅甫書。
《文政十年版本》
△東京大学蔵洒竹文庫本 1冊
◎安田女子大学蔵稲賀文庫本 「須磨の記」「菅神／須磨記」 1冊 ＊巻末識語「（道真ノ伝記部分略）此須广ノ記ハ社司／大鳥居ノ秘蔵ニテ世ニ知人可シレ稀ル予蜜ニ拝写シ所持成モノユヘ大気オホケナクモ桜木ニチリバメ令ルニ拝覧一モノナラシ音訓仮字カンナノ違ヒメモアランハ本ノ侭ナレハ見ユルシ給ヒテヨ／文政十亥年正月 東都俳師 芝春来」。識語の後、三十一句の発句を載せる。「栃内」「凹泉堂蔵書印」印。稲賀敬二先生旧蔵本。

二 諸本の奥書と伝来について

諸伝本の奥書により、つとに津本信博氏は、「現存本の書写年時から推して蓬左文庫蔵本の享保十六年写が最も古く、次いで名大本（皇学）の享保十八年・速水房常写本、早大本の享保二十年・嶷子写本をあげられるが、今のところ享保年間を遡るものは見あたらない」と指摘しておられる。[4] 今回の調査によっても、奥書等に記される書写年次の中で信頼できるものは享保年間を遡らなかった。ただし、実物未見の本だが、岡山大学蔵池田家文庫A本は享保十三年写とあり、大阪天満宮蔵D本の本奥書にも享保戊申（十三年）の書写のことが見える。また、大和文華館蔵本の本奥書中には享保己酉（十四年）書写の由が記されるから、享保十六年より古い書写を伝える本は複数存在する。これらによれば、本書成立の下限は享保十三年（一七二八）ということになる。津本氏が挙げられた以外に、奥書において享保年間の書写を伝える本としては、神宮文庫蔵A本と相愛大学蔵春曙文庫蔵本の享保十九年写、京都女子大学蔵本の享保二十年写が挙げられ、奈良女子大学蔵本と広島大学図書館蔵A本の本奥書にも享保乙卯（二十年）書写の年次が記されている。東海大学蔵桃園文庫C本には享保十六年の本奥書が見えている。本書が享保年間から世に広まり始めたことは動かないようである。

成立の上限については不明としか言いようがない。北海学園大学蔵北駕文庫本の貼紙には、「元本は應永年中の写本ニ而」云々とあるが、もとより信用できる記述ではなく、『竹柏園蔵書志』（昭和一四年巌松堂書店、昭和六三年 臨川書店覆刻）によれば、竹柏園本には建武二年（一三三五）桑門釋、文明元年（一四六九）一條兼良の識語があるというのも権威付けのために創作された奥書であろう。

津本氏は、「内閣文庫本が壺井義知写であり、九大本が壺井義知注本であることから察すると、享保二十年十月、七十九歳で他界した壺井義知の手になる可能性も大きいと言わねばならない」と述べ、故実家の壺井義知（よしとも）（明暦三〈一六五七〉―享保一〇〈一七三五〉）を作者

に擬する説を提唱された。[5] 確かに、享保十六年写の蓬左文庫蔵A本や同年写の本奥書を持つ東海大学蔵桃園文庫C本、享保十四年の本奥書のある大和文華館蔵本など、比較的書写年次の古い本に義知の「此一書加州金沢川嶋氏より到来（至来・出来とも）してうつしとりぬ尤殊勝之御記也」という奥書を載せているので、早い時期に本書の書写に関わった人物であることは疑いない。神宮文庫蔵D本には、「この須磨の記といへるは菅家のしるし給ふけるよしにて、加賀国川嶋の何かしかもたりけるを、壺井義知これをうつし、又多田義俊かうつしとりけるとて世にひろこれり」という叢書『清渚集』の編者中川経雅（つねただ）の識語がある。多田義俊（南嶺）（元禄一一〈一六九八〉―寛延三〈一七五〇〉）は義知の門人。神道家で、浮世草子作者としても名高い。義俊の奥書は、筑波大学蔵A本・広島大学蔵C本などに見え、大阪天満宮蔵D本にもそれらとは別内容の奥書が見える。中村幸彦氏は、義俊を本書の偽作者と考えられたが、[6] もとより確証はない。義知は仕官を求めて金沢に移り住んだことがあるので加賀とはゆかりがあり、川嶋氏なる者から元本を入手したとする義知奥書の記述もそれなりに信用できそうな気もする。義知はその本を書写して傍書や振り漢字などを施しただけというのが正しいかも知れない。実際、義知の奥書を持たない伝本には傍書や注記が全くないものが少なからずあるのである。義知による付注本とは別系統の本があるとすれば、義知が作者であるという説は採れなくなる。また、義知筆とされる内閣文庫B本には本文と同筆と見られる異文注記が多数存することも重視されよう。

多田義俊の奥書を持つ筑波大A本と広島大C本には、ともに義知の奥書も記されているが、義俊の奥書には義知の名が出てこない。この『須磨記』は道真の太宰府行のさまを描いた書でありながら菅原氏の六家では兵火によってみな失われてしまったので、自分は加賀金沢において一本を得、それを書写して菅家六家に各一部贈ったという。それとは別に筑前の一商人からも一本を手に入れて加賀の本と比校してみたが、大同小異であった。筑前の本は今清家文庫にあるという。義知が金沢の川嶋某から入手して写したという本と同一本かと思われる本が、義俊の奥書では、自分が加賀で見出したように記されている。このあたりのつじつまをどう合わせればよいのだろうか。義俊の奥書には年次記載がなくいつのことか不明だが、享保十五、六年頃、『旧事記偽書明証考』を著したために義俊は師の義知から義絶されたと伝えられるから、この奥書には義俊の師に対する複雑な思いが反映されているのかも知れない。しかし、だからと言って義俊が『菅家須磨記』の偽作者であるとは限らない。

義知の門下の一人、速水常房（元禄一三〈一七〇〇〉―明和六〈一七六九〉）の識語を持つのが名古屋大学蔵皇学館文庫本である。享保十八年（一七三三）の年記がある。それによれば、この本は先年書写したものだが、庄田右衛門尉なる人物に貸してあったのが返ってきたとある。この本にも義知の奥書があるから、常房は師の本を借りて写したのだろう。義知と義俊・常房ラインに限っても、本書の伝来

に関してはなお謎が多く、探究の余地が大いにありそうである。それを含めて本書の伝来に関する考察は今後の課題としたい。

付　架蔵本の翻刻

ここで、本論に言及していない架蔵の一本を紹介し、全文を翻刻しておく。決して重要な古写本というわけではないが、壺井義知の奥書の他、蓬左文庫A本や桃園文庫C本に見えるのと同じ享保十六年十一月の奥書を本奥書として持つなどやや注目すべきところもあり、また、本書は振り漢字・行間注・欄外注まで含めて翻刻されたことがないようなので、その意義なしとしないと思うのである。

簡単に書誌を記す。写本・一冊。楮紙・袋綴。寸法、縦二三・九cm×横一七・〇cm。栗皮色渋引き刷毛目文の紙表紙中央に無地の題簽を貼り、「菅公須磨の記」と外題を墨書。扉やや左寄りに「菅公須磨之記」と扉題を記す。前後見返とその裏に反故と見られる墨書多数。本文墨付十一丁（奥書とも）。一面十行書。朱による句点・振り漢字・傍注が多く施され、上部欄外に書き入れ注が四箇所ある。巻首に「雀栖亭／貯典籍」の方形朱印、巻尾に「雀栖亭秘蔵之書」と朱書。本文の後に、まず壺井義知の本奥書を記し、「此書者菅神御記也讀者盥漱而可拝見也」という他本にもよく見える奥書があり、「享保十六辛亥年十一月寫之」と年時を記す。さらに天保六年と思しき年（「あめやすき」を天保の訓と見るが、同六年は乙未（きのとひつじ）の年）五月の雀栖亭藤原正峻書写奥書が存する。正峻は目下伝未詳である。

以下、底本の行配りそのままに翻刻し、傍記の類も再現したが、欄外注は該当箇所にA～Dの記号を付し、末尾に一括して記した。

菅公須磨の記」（外題）

菅公須磨之記」（扉題）

昌泰ふたはしらにあたれるつ（己）ちのとのひつ（未）しの年
二月中ころ、ゆくり（不意）なきみことのり（詔）をかしこまりて、おほ（大）
いもの申（納言）といへるさへ、身にはおほけ（覆氣）なく（無）そおもふ（卑下詞也）へ
きを、うち（内）のおと（大臣）、をなんをちに（越任）ん遙に思ひなして、
右のおと（大臣）、といへるいひしらぬ、高根の雲にまう昇れとの
宣命の、いみしうもあさましきまての、わい（我家ノコト）へんに
あまくたれる事よ、みぎ（右）んのちかき（近）みまもり（衛）のつ
かさのかみ（大将）（府）までもとのことくにうけはりて、ことのとりか
さね給へる事のかしこ（畏）まりをなん、すへて家を起し名
の後の世のすさみ（号）にもと立のほせん事は、人の親に」（1オ）
つかふまつれるはねちけ（誠）たるといへと、たれしかその本意
をいとはんや、臣か身のをきところなき幸のいみしき、
いときなき君をうしろ（背）におひけん（負）、むかしめきたるひし
りといへと、そのとみ（富）うらやむへくもあらす、しは（數）〳〵のたから、
大いなるふねにうつ（堆）たかうして、はるかなる海にうかふと聞

えしもいかにそや、このきはに思ひかけんにはにけなか
るへし、文章得業の両生など家のめいほくと、かけ(掛)
まくもかし(賢)こくも、そのつかさきはめし事を、おもへは〳〵今のさち(幸)
にはをのつから家人めくものをさへ、かうやうのつかさに
はかたをならへひさを入へきになん、これひたすら」（1ウ）
身のいさをしのかゝるきさみ〳〵に、せめて道〳〵ものせさらん
にやは、おほん(御)いちしん(一人)の御めくみ(恵)四すみの浪をひたし、大空
の翅千いろの底のいろくつ(鱗)といへとも、をのかこゝろを得、
ところをきはむる事の御いたり、ふかくおはする御代に
あひ奉る事のいみしきによてなるへし、さるにつゐてよ、
夜中曉のいろわけなく、まうのほる(参昇)事のしけくして
なん、つかうまつる道はかしこまりいひしらすはかりなしと
いへとも、うつはのふようなる事のあさましさ、夢うつ
ゝのたかひめもいへはさらなりや、東の雲は曙なんともせさる
にも、衣裳をさへさかしまたてゝまうのほる事、から国の(欄外注A)」（2オ）
博士の作りしうたの心はへ、いくあかつきかは思ひわする、事あらんや(と)
とする、されとも九五象(欄外注B)はたれしか、上中下のたかひめあらん、
臣か身此象に立のほりて、あやうき(欄外注C)事のまかきのうちよ
りいつる事、人の思ひさかしらふことは更にもいはす、君の
御かへりみのほとは、すへて身のつたなくしそくへき際はし
らすしも侍らねとも、聖の御代に身をはふらさんも、かし
こまりもうけはりかたくてなん、おもひのとめ侍るにことし
かん(神無)な月の始つかた第七の御方(齋世親王)臣か家に、紅葉のえん
にことよさせおはしてなん立入たまふに、思ひかけぬさい
はいとらんとするきはゝ、はるかにはおもひもよらす侍れ」（2ウ）
とも、立のほりぬるつかさきはめぬる幸を、此事とうれしみ
思ひものして、けいかい(契芥)家のうつはものといへとうつはりの
塵にましへて、とはかり弄し侍りけり、左(時平公)のおとゝの常
にきしきたちて、物〳〵につけて目をとめ眉をそはたつ
る事の、おほやけならぬにはあらめやは、餘所なからいひしら
す身のつみ(ナシ)によこさまことに、うへにもきこしめいたりや、さりや
うけはらせ給ふにはあらさらんを、人のさかにくき世のならはし
にとり弄するたらめ、たつさかしら人も上中下とつとひ
ぬるになん、七のつみ数へあけさせたまへ、弾正の尹のみや
より明法博士して、こらさる(懲)、事のかしこまり、むねとるへき」（3オ）
人臣の家ににけなくそあるへきや、かうかはれる世のあらましは(ナシ)
いかならん世のためしにも成くたさんを、つら〳〵おもふもいはけ
なきよを、思ひはるけんそかなしかるへきわさなるへし
されと心に思ふふし〳〵、あまのかく山のますみ(白銅)のかゝみ(鏡)に
かけものして、そのあか(贖)なひ申きこえたてまつれる、うへ
にもおほしゆりにけるにや、その後はありしやうにこそ
物し給はさりけれとも、つゐて〳〵の御かへり見はさり
けなきめいほくなりけり、九五の幸はあらましに思ひまうけ
ためれとも、神ならぬ身のつらさよと、みの事のやうにむね

いたうくるしかりけり、高辻のたちをかりのうつろひ」（3ウ）
處に思ひものして、此ころの事に心はなれし、つかさしそく
やうになんしてうつろいはへりし、身にしたかふをなん（もの）
は、くらの文はこ二しなのつくゑもの、すゝりやうの外
更に侍らさりけり、常に楊梅の宰相のぬしをなんかた
らふ、あそひかたきにかよはしめたり（もとゆきかよはし）、年ころのから哥
やまあとうたのなかきみちかき迄をかたみにいひゑらひ
てまくらことに手つから弄したりけるを、むかしいつの
月日にやあるへし、つゝりたるからうたの、今やうの身に思ひ
あたれるもありて、いとしもせちなる事は、かゝる身のゆく
すゑをしらさりけりと、思ひさうするもあさましき」（4オ）
までの心をとりならんやは（と）、かりやひめとするは（ものする）、家のむまこの
いとけなきなれと、かしこくも文字かそへわたり、から哥をす
くれてくちにもすんし、手してもかきしるいたれは、我むま
子なからも此よの人ともおほへすなん在けり、うへの御心
つかひのわきかへらせ給ふ事はいともかしこけれはものし
つくさす清つらのぬしか、さくにとくさみか（策）ゝんは（木賊）、おもて
はさるににて、君の御おもと人のよからさらんを、外のつかひ
わさ給ふはりすくれてすゝまんを、おほやけせんしたて
まつらせんやは、いはけなきいかんなといふ物を（は）、女もしに
つらねてさへ、みつからもとゝこほるへきを、鳥のあとのむ」（4ウ）
しゑりたるにのりたらんを、はしりかきとはせてうせん事の、

たくひあるへからんにつけて、をまなき心のなみたは、やみの
うつゝなりけん」、白大夫といへる男伊勢より年〳〵とひ来り、
我家のかたはへなる宿をかりのやとりところとなんせしに
此ころ又、例のちきりたかへすして來れるも、わかうつろひ所
を、とみ（頓）の事のやうあやふめて、おなしすみ家をしめな
んとてしたしみよれり、されとうつろひところには
おもひはゝかる事もありて、醒井の常楽院の僧房にう
つろはせたり、ことしも月ゆきほしうつろひて、春の草
緑をつけ庭鳥暖を報して、良太賓（白歌）か閑流帯石池」（5オ）
とものせしも、まのあたりにすして、つたなきはらわたをあたゝめ
すといふに、このころむまこの姫なる爰に來りて、やはし
らのうちなくさめぬる、この句をたゝう紙に書てと物し
せめけは、しるしにとみにあたへぬ、漸花梢にまれにして
雪よりも匂ひはなつかしくて、庭につもれるにまた來
む春の名残、老のまなしり露をうかへぬるに、例のむま
こなるふところをたゝう紙に調せしを、とうてゝわらはしき
まなこにも、おなしすちにうかへてなんかはかす、あめかし
たまつりこつへき身の、いかてかうよもきふのすみかに、虫〳〵か
はつと床をあらそふ事のほい（ほいなきや）、ことやうなる事は世の」（5ウ）
中なにかし（ナン）かはりあらさらんや、夏はいとし（ゞ）せはき住ゐの
いふせきに、たゝ宰予（欄外注D）かね心のすさみにのみ、三伏をしの
くはかりなりけり、かくして秋風ふきわたりて、井梧萬天

秋と吟して、御簾のたゝれに、萩(萩カ)の葉のうちあてたるも、
やうかはりたるうつろひところ、爰にはさちあるやうにおほ
えぬ、鳫のなきわたりたる霧間の夕へ、きぬたのとをく
うちかよひたる五条あたりの家さとも、夜寒のほと思
ひやりかなしき事、かうやうすくせにはいとしもふかうお
もひたとりけり、九月の末つかたより、改官の解状くたりぬ
ると、いつくしもなき人のさえつりありてなん、これらは身の」（6オ）
をこたり天焉(道カ)のしかあらしむる事も(と)、かしこくも思ひとりぬ
たるに、霜月の中のもちの日解状まことにくたり、左大弁な
にかし、弾正尹のしりへに候して侍るといひつたへ來りぬれは、
やかて本家に立かへりて、そのかしこまりをうけ給るに、
大宰権の帥にうつろふへきとのみことのり、まさしくも
おほしくも侍れは、笏さゝへして、いとゝうや〳〵しうしぬ、ことし
はしほせのあらし浪の立ゐもむくつけからんを、つとめ
てのはるに、かの府にまかるへきとの、弾尹(正)の心つかひあ
れは、それにをこたりもつたなき(る)やうなれとも、ことしは
そのまゝもとのうつろひ所に立帰りて、春をまつ間」（6ウ）
の心はへ、ますらおの本意きえたるやうに、棟梁のうつはかく
へき身ならぬ事、心肝にもはちかましくそ日数送る事よ、
年すてに臘をせめきて、をきそへたるいたゝきの霜
もこゝにはとけやらすなん、さすらふる日もむ月の廿日と
解状さたまりぬ、そこら家門のむね〳〵しからぬなにくれ
とつとふるもかしかましくやはある、帥の正記なと官府(符)
にそへて、弾(弾正)の忠もて来ぬ、日ころたうとみける観世音
の、西朱雀なる正像寺のかたわらにおはするに、ふさかつ
のぬしして申奉れる、
〳〵九重の春をへたてゝさしもくさもゆるかひなく世をやつくさん」（7オ）
とかへりこちてなん、かしこまりのあさましき事、おほな〳〵傳へ
ぬ、第七の御子も同し外さく(爵)の罪にふし給ふて、靱(ユキ)かけた
てまつると聞へしに、貧家の娘つかうまつりし事の、になき御不
幸をかなしみ思ふに、むねそこらいたましく、良陽か安座
の椅子もゆかしうおもふよりぬ、からう(ラ)してむまこのひめむかへ
んと、家門こそりていへは、泪しとゝにものし、袖も袂もわいか
たけらし、さはいへとはたしてけふを離別の日となしなんとか

（2行分空白）

ことしいかにそやかみしもくゆる象をものすへきならねと」（7ウ）
も此いて立事のほいやうかはれる旅にもよほさるゝも、うつは
もの、垢(拙カ)き事おほひて(え)、空になんうたへ事しは〳〵すと孫(かの)
元卿かいひためるをなん、雁旅のすさみとして既むつき
廿日の、寅四つはかりになんかとてせよとてか看督長とのを
さのつたなきらせめきて出たつ事よ、かりやひめ白大夫
のぬしを、須厂といふ所まてとつれなひてなん、あとにはそこ
〳〵のものにつとふ

〻君か住宿の木すゑをゆく〳〵とかくるゝまてにかへりみしはや
それより淀河尻なといふ（いふ所より）、河瀬道にもたとりぬれとも、お
もはぬ道に思ひたつ事をなん、うろくすのあみのめもれ（ぬ）」（8オ）
心はへなとくちにとなへぬ、さたの庄（河州佐太庄）といふ所にて、ひるのかれい
ぬしてなん、やうやくみやこの山もみえすなりぬる事と
なけくこゑ（と）しは〳〵なり
〻立帰りいつしみやこの春霞よし此たひはへたてあるとも
なみはやのくに、なみはやのうらをなん、今なにはのみつな
と、ことわさめきてをしゆるに、そこらつとへる舟数いひしら
すあまたゝひなるに、我乗うつらん舟には、せそうけうまん（軫障凶慢）
なとはしらせて、もの、ふこたひ（此度）はるかになりて、五手十
手におしわけたり、武庫の浦にて、雨雪にましりて降よ
こたへぬるに、四方の山かしこの礒らも心あてやみをたとりぬ」（8ウ）
かりや姫こゝち例ならぬよしをものするに、典薬の史生和氣
重氏かものせし舟も、跡につとひぬるをまねきてなん、薬の
事まかなゐて、そのやまひつとめてはおこたりぬれは、わたつみ
の心はへとりぬるから哥をなん、ひとふたつ（一つ）朗詠してゆく、あは
ち嶋もはるかに見わたさるゝに、はやはしらせし舟も、須厂の
関ちかうちかつけてなん、浪山をおこし、くしらなといふうろ
くつのおさも、こゝにあらはれぬへく、おとろ〳〵しうかみ（雷）なりて
まつ此浦にとからうしてつくに、いかりといふものをさへいつち
とられてあやうき事たとしへなく（し）、爰につきぬる日ははや

十八

夕日西にかゝやくとしてもは（ナシ）侍らねともなみのひかりもはれ」（9オ）
ゆへ（く）やうなれは、なにくれとせしまゝに、暮ちかうなり、そこら上野
の岡といふところ、なにかしの寺あるよしにて、かねさへかへりて
耳頭（本ノマヽ）うれひをもよほせり、つとめてそこのせうかけ（贖詔）（みけたる）橋季
祐といふおのこ、こゝろさしから哥にありて、やつかれかかゝる
よこさまなる旅も、かへてはさちある事なと作りめくに（めくむに）
波頭雁路霞（本ノマヽ）　萬頃涙潺湲
争識播土澤　今宵辞雲仙
くちつからすし（誦）てあたへぬ、空のけしきもはれぬれは、
すてにあらうみのよそひきはまれは、かりや姫をなん、
めのとなる右衛門のさくはんにものして、みやこまてかちよ」（9ウ）
りおくり返しぬ、さためなき身ふたゝひのたいめんはかり
かたさ、かき付ぬへきに筆みしかけれはもらしぬ

此一書加州金澤川嶋氏より到來
してうつしとりぬ尤殊勝の御
記也

朱字傍注之
義知判

」（10オ）

此書者　菅神御記也讀者
盥漱而可拜見也

享保十六辛亥年十一月寫之

」（10ウ）

あめやすきむつばしらにあたれる
ひのとのひつしの年　仲のなつ
すゑの五の日

土岐氏ヨリ借之（朱）
於雀栖齋　藤原正峻謹書

」（11オ）

雀　栖　亭　秘　蔵　之　書（朱）

」（11ウ）

【欄外書き入れ注】

A　隆英按／詩齋／鳳（風）曰東方／未明顛／倒衣裳／顛之例之／自公召之（2オ）

B　易乾九五爻／曰飛龍／在天利／見大人（2ウ）

C　論語季氏篇／曰吾恐季／孫之憂不在／顓史而／在蕭牆／之内（2ウ）

D　論語公冶長／曰宰予／晝寢子曰／巧（ママ）木不／可彫也／糞土之牆不可汚也

※架蔵本本文の誤りかと思われる箇所を中心に、「日本古典偽書叢刊」所収本（底本は内閣文庫B本）との異同を該当本文の右に（　）に入れて傍記した。該当文字が存在しない場合は（ナシ）とした。

〔注〕

（1）『日記文学事典』（平成12年　勉誠出版）「須磨記」の項（津本信博氏執筆）。

（2）拙稿「対校『菅家須磨記』（広島大学蔵本・その他」『広島大学博物館研究報告』第二号（平成8年3月）。

（3）拙稿「翻刻・注釈本『菅丞相須磨之記』（八戸市立図書館蔵・南部家旧蔵本）」『広島大学文学部紀要』第56巻（平成8年12月）。

（4）津本信博編著『近世紀行日記文学集成』第一巻（平成5年　早稲田大学出版部）「解題」。

（5）注4に同じ。

（6）中村幸彦「偽作論」『中村幸彦著述集』第十四巻（昭和58年　中央公論社）。

Fundamental Study on *Kankesuma-no-ki*: Manuscripts and Its Postscripts and Annotations

Yoshinobu SENO

Kankesuma-no-ki is a writing dealing with travels by an author in the guise of Sugawara Michizane. The writing begins with a description of the author being appointed Minister of the Right. In the travel diary, while on a journey to Suma, he speaks his mind: how he felt when he was demoted to Dazai-no-gonnosochi and then left for Dazaifu. The author is said to be Tsuboi Yoshichika, a scholar of the Edo period, but there is no certain evidence. In this paper, in order to know how *Kankesuma-no-ki* has been really transmitted, I research as many handwritten copies as possible and put the annotations in order, including those in the postscripts and those between the lines or in the margin. Also I try to reprint one of the books kept on my shelf.